



第9回 環境まちづくりフォーラム・埼玉

3月13日(土)に「第9回 環境まちづくりフォーラム」が開催されました。このフォーラムは、県内各地域の環境団体が実行委員会を作り、毎年行われています。今回は、西埼玉地区の10市2町の

環境団体・自治体を中心となり、川越市で行われました。NPOさやまからは土淵事務局長以下、実行委員4名と、分科会リーダー2名、分科会の事例発表4名が

参画し、主導的立場で活動しました。また、当日多くのNPOさやま会員も参加し、全体で約500名となり、活気溢れる有意義なフォーラムとなりました。

開会にあたり、小沢環境大臣、上田埼玉県知事、川合川越市長の祝辞が、DVDあるいは代読で披露されました。環境大臣からは「鳩山政権として温室効果ガス25%削減目標を推進する、中でも地域発・現場発の環境まちづくりが重要」とのメッセージが、県知事からは「県はすでに2005年比25%削減に動き始め、特に、緑と川の再生を進めている」との話がありました。



開会のあいさつ
米澤忠弘実行委員長

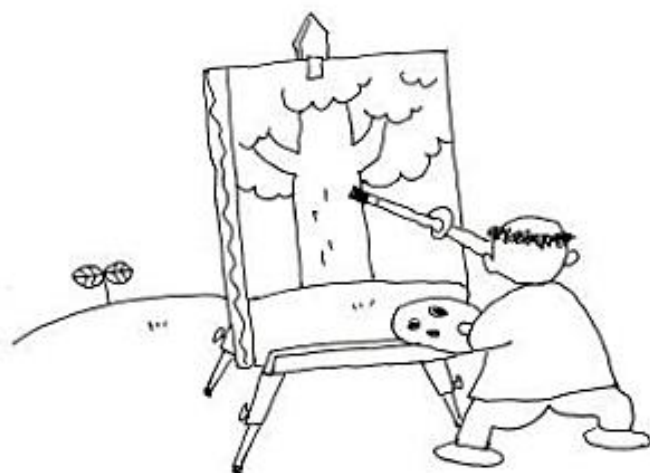
続いて、東洋大学准教授(かわごえ環境ネットワーク理事長)の小瀬先生による「環境を活かしたまちづくり」の基調講演がありました。「環境」あるいは「環境まちづくり」の推進には、温暖化の脅威を説明する以上に、多くの人と身近な問題を見つめ直すことが重要で、市民と町を歩き、その環境、快適さを地図に落とし込んだ環境マップを作成した事例が話され、また、その情報発信に広報活動がとても重要とのことでした。

午後は、温暖化対策、太陽光、緑化、里川づくり、ごみ、大学交流の六つの分科会に分かれ、講演、事例発表、ディスカッションが、各会場で行われました。環境活動に参加する団体・メンバーの横の繋がりを深め、連帯し、その輪を広げ、コミュニティとしてその力を発揮していくということが、各分科会における議論に共通した意識でした。



温暖化対策分科会のディスカッション

(環境まちづくりフォーラム実行委員 児玉 靖)



環境くん

石ヶ川しげひさ

各分科会の活動報告

緑の分科会

三つのイベントで緑の保全の大切さをアピール

2月～3月にかけての三つのイベントを紹介。
 ①2月11日、第13回荒川流域再生シンポジウムが嵐山町の国立女性教育会館で、
 ②2月27日、緑の分科会主催で狭山市のみどり公園課において環境講座「狭山市の緑の保全と課題及び今後」が赤坂の森公園で、3月13日、第9回環境まちづくりフォーラムが、川越市民会館・やまぶき会館で、それぞれ開催された。

①では、約130人の出席の下、NPOさや環緑の分科会から「都市部に隣接する平地林の保全にかかわる税制システムの見直し提言」を報告。強い関心を引くと共に、他の団体でも同様の問題があり「連携して大きな声にしていきたい」との意見などがあつた。②では、18人の出席の下、狭山市の緑の取り組み、特に



NPOさや環の事例発表

緑の基本計画の内容、緑の保全及び創出施策の説明、過去に行なわれてきた地域制緑地や公有地化、緑化推進の状況などについての報告があつた。また、22年度は特に、公有地の萌芽更新を進めていくとの事で、市民との連携・協働を考えていきたいとの事であつた。活発な意見交換があり、有意義な環境講座となつた。③では、本紙の表紙にあるように、6分科会からそれぞれ事例発表。

緑化分科会において、NPOさや環から「森林施業と雑木林の保全」を事例発表した。西埼玉各地からの出席者30名。緑の保全の手法として、こんな方法もあるのかという、狭山における森林施業や行政への働きかけの事例を知ってもらいたい機会となつたと思う。(小川泰男)

川分科会

入間川における小学校の環境学習支援活動

環境まちづくりフォーラム・埼玉の「里川づくり」分科会で、「入間川で子どもたちと遊ぶ」と題して、入間川小学校と入間川東小学校4年生の“総合的な学習”での入間川をフィールドにした環境学習支援活動の事例発表をした。

最初に「新河岸川流域の里川づくり」についての講演があり、主に黒目川での川づくりなどの経験を踏まえた「計画段階からの市民参加」の重要性などについて、お話があつた。その後、事例発表として「西埼玉の各水系にアユの復活を」と題した、昨年の荒川流域ネットワークによる標識アユの放流調査結果の報告と、高麗川での「市民によるピオトープの自然環境の再生・保全」について、さまざまな活動報告があつた。最後に、NPOさや環川分科会か



カヌー体験をすることも

ら冒頭に述べた環境学習支援活動についての事例発表を行なつた。

その内容は、活動に至った経緯、カヌー体験、野外観察調査、地引網による魚類調査などの具体的な活動、反省点や苦労した点、生徒・親・学校からの評価、今後の課題などについてパワーポイントを用いて話した。おおむね、フォーラム参加者の共感をいただけたようで、フォーラム終了後、いくつかの環境団体の方から「我々もやってみたい」といったお話や、励ましの言葉などをいただいた。これを機に、次世代を担う子どもたちの環境意識を高めるための、このような活動が多く地域に広まっていくことを期待している。(伊藤勝彦)

トピックス

「さやま子ども環境カルタ」“さいたま環境賞”を受賞

2月24日、一昨年、NPOさや環の企画で作成した「さやま子ども環境カルタ」に対し、「第11回さいたま環境賞(県民部門)」の受賞が決定したとの連絡が入りました。小・中学校の生徒への応募で読み札を作成した事、子どもたちがカルタ遊びを通して狭山の環境が学べる事、英語でも楽しめるように工夫されている事、また、実際にそのカルタが地域で活用されている事などが評価されたものと考えます。カルタ作成の折、関係者皆様のご協力、ありがとうございました。

(さやま子ども環境カルタ実行委員長 毛塚 宏)



温室効果ガス25%削減をどう進めるか

環境まちづくりフォーラムの温暖化対策分科会は「温室効果ガス25%削減をどう進めるか」をコンセプトとして進められた。

(1) 第1部 講演 「地球温暖化の現状と対策」

環境科学国際センター 須藤隆一氏

最近の政治的状況の解説と、温暖化の現状と対策が話された。温暖化は確実に進む、そのために「対応策」ではなく「適応策」の検討が必要である。適応策とは、単なる温暖化防止策ではなく、環境汚染・途上国援助等を含めた一石二鳥の策である。

(2) 事例発表 (市民) 齋藤眞之助氏

松岡寿賀子氏

(企業) 株式会社 石田 嵩氏

(行政) 箕輪信一郎氏(川越市役所)

CO₂削減に大きな成果を達成した事例が発表された。市民からは「環境家計簿」を活用した事例、企業からは「デマンドコントロール」から多様な活動に展開した事例、行政からは市施設、全市立小中学

校への太陽光発電の設置事例について発表された。

(3) パネルディスカッション

基調講演をされた小瀬先生をコーディネーター



熱心な議論が行われる

として「25%削減に対し、我々は何ができるか」をテーマに進められた。事例発表では「我」が主役であった。これをどのように「我々」に広げるかが議論された。会場の参加者も加わり、「とにかく粘り強く働きかけることが重要で、さらに実データに基づく進捗管理、見える化の推進等が重要」との議論が、熱心に行われた。

また、エコライフDAY創始者の浅羽氏も参加され、NPOさや環にとっても大変有益であった。

(児玉 靖)

ごみ減量分科会

「環境まちづくりフォーラム・埼玉」ごみ減分科会報告要旨

ごみ減分科会からは、2つの講演と3つの活動報告および会場からの質疑、討論が行われた。

最初に、NPOさや環ごみ減分科会の土淵 昭が「効果的なごみ減らしをどうするか」をテーマに講演を行った。全国の自治体では、ごみは燃やすのが最もコストが安く、資源としてリサイクルをするのは高くつくので、「リサイクル貧乏」になる、というのが定説になっている。

狭山市の例として、燃やすごみを従来通り焼却すれば、年間18億5千万円(焼却炉の原価償却を含む)かかるが、資源としてリサイクルすれば13億6千万円しかかからず、ずっと少ない税金負担で済み、「リサイクル貧乏」というのは誤りである、との試算を提示した。

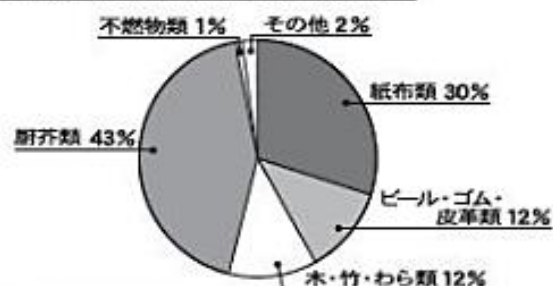
講師(財)日本容器包装リサイクル協会プラスチック容器事業部長 浅川 薫氏からは、プラスチック容器包装材のリサイクルは、マテリアルリサイクルの場合、トン当たり7万円の費用がかかる上に、約半分が残渣になる。ケミカルリサイクルの場合はトン当たり約4万円の費用で、80%~95%処理出来るにもかかわらず、現在の法律ではマテリアルリ

サイクルの方が優先になっている、という矛盾を話された。

事例発表の3点は「家庭で出来る生ごみ処理方法の提案」樋口裕子氏、「食品リサイクルシステムで社会貢献を」西 慎太郎氏、「埼玉のごみについて」中澤啓子氏から、それぞれ発表があった。「埼玉のごみについて」の発表で、埼玉県全域のごみ焼却量を煙突の高さに換算した図が紹介され、リサイクル率の低い自治体ほど1人当たりの焼却量が多く、そのほとんどが市境に設置されていて、焼却炉は「エゴの塊」と、表現していた。

(土淵 昭)

●平成18年度 埼玉県のごみの内容



動物たちにも目を向けて

最近問題になっている地球温暖化について、狭山市をはじめ市町村、県、たくさんの国々、企業が解決しようとしています。一方で、人々の意識は人間のことに傾いているような気がします。私達が紙や電気などの大量消費をしている瞬間に、気温が上がり、氷が溶け、生命を脅かされる動物や、森林伐採で住処を奪われる動物、生態系が壊れて絶滅してしまう動物たちがいます。私達は、人間からの被害を受けている動物を助けるために、さまざまな努力をしなければいけないのではないのでしょうか。

(山口 慧)

3月8日、狭山ロビンススポーツ少年団の代表、高木眞治氏にお会いして、少年団の結成やNPOさや環への入会のきっかけ等をうかがいました。

この少年団は、入間野小学校を拠点に、昭和56年に創設された団員総勢45名、指導者27名の、軟式学童少年野球の団体です。『明るく、楽しく、元気よく、そして「礼儀とあいさつ」』をスローガンに、市内16団体のひとつとして活動しているそうです。

さてそこで、野球と環境のつながりを尋ねたところ、「野球をベースに、子ども達に環境に関心を持ってもらいたく、年1回は地域に貢献を

と、学校周辺やキャンプ場へ行った時などのゴミ拾い、また、さやま環境ウォークに参加することを実践していること」だ

そうです。「しかし、思ったほどゴミがなく、子どもたちにヤッターという達成感に欠けるんですよ！何とか達成感を感じさせるような企画を考えたい」と熱く語る高木さん。また、「出来るだけ自然に触れる機会を、と考えているが、冬場や



大会で入場するロビンススポーツ少年団



代表 高木眞治氏

雨天時の対応に苦労しています」と、お困りの様子でした。

さあ、NPOさや環の森の番人 小川さんの出番で「そんな時は、シイタケのコマ打ち体験などは、子ども達が喜ぶのでは？」と投げかけ、私からも「さやま子ども環境カルタが、

この度、さいたま環境賞を受賞したのですが、このカルタを雨の日などに室内で使ってみては？」と提案しました。環境カルタは市内の小・中学校の子ども達から応募した狭山の環境に関する読み詩を、カルタの読み札にしたものである事をPR。シイタケのコマ打ち、および環境カルタとも大いに興味を示され、「それは戴き、早速実行したい!!」ニコッと高木さん。渡りに船の良い感触に、しばし歓談となりました。

そして、「今後は？」との問いかけに「子ども達が自然に環境について学び、野球を通して環境を感じて欲しいですね。その土俵があってよかったです」と、お人柄か、終始笑顔で答えていただき「いつも子ども達から勇気とエネルギーをもらっていますから」と、若さの秘訣も明かされました。

NPOさや環としても、ネットワークの大切さを知る有意義なひと時でした。(仲村みどり)

イベント情報

★NPO法人さやま環境市民ネットワーク 総会のご案内

第4回総会を次の通り開催します。
多数ご出席下さい。当日の新規入会大歓迎!

- 日時：平成22年5月8日(土) 午後1:30～4:30 (受付：午後1:00～)
- 集合場所：狭山市中央公民館 3階ホール
- 問合せ先：NPOさや環事務局 伊藤勝彦 Tel./Fax. 2956-6357

★リサイクルマーケット・さやま

- 日時：平成22年5月15日(土) 午前9:00～午後1:00 (雨天決行)
- 場所：上奥富運動公園
- 主催：リサイクルマーケットさやま実行委員会
- 問合せ先：リサイクルマーケットさやま実行委員会事務局(第一環境センター)
Tel. 2953-2831

市内在住・在学・在勤の個人、市内で活動されている
民間団体や事業者であれば入会する事が出来ます。

問合せ先：NPO法人さやま環境市民ネットワーク事務局

事務局長 伊藤勝彦 Tel./Fax.04-2956-6357 携帯 090-4535-2394

●Eメール=o_surd@planner.so-net.ne.jp

●ホームページ=http://sayama-kankyo.org

会員数=平成22年3月1日現在(総数184会員) 個人153人/団体21団体/事業者10事業者

会員募集

皆さまのご入会を
お待ちしております。